



高島獣医科魚津病院長
(魚津市本江)

長田 雅美

先日から北日本新聞でマダニから感染する重症熱性血小板減少症候群（SFTS）に関する記事が何度か載りました。6月下旬には県西部の女性が感染したと報道され、石川県では昨年と今年6月に猫の感染が報告されています。三重県では感染猫を治療した獣医師が亡くなりました。

マダニにかまれなくても病気の動物からも感染します。6月末まで、全国で過去最多だった一昨年の同じ時期を上回る91人の感染があったとの報告もあります。

動物では犬よりも猫の方が重症化する傾向が強いとされています。死亡率は人で約15%、犬で約

感染症を媒介するマダニ



吸血して体がばんばんに膨らんだマダニ。患者さんの犬についていた

30%、猫で60〜70%とされています。猫は進行が非常に早く、発症から数日で死に至るケースも多いようです。

潜伏期は6〜14日ほどで、人は風邪のような症状から始まり、元気の低下が現れ、猫は黄疸が出るのが特徴です。特効薬がないため、対症療法で体調を戻すしかありません。

近年山間部だけでなく、市街地でも感染が確認されていますが、野生化して増えているアライグマ

ペットへの駆除剤投与 大切

やハクビシンが関与しているのではないかとされています。市街地でも、畑作業や草むしりなどでも肌を露出しないことが大事です。

ペットの予防は、何よりマダニにかまれないように外に出さないことが一番ですが、外に出す時は草には近づかず、何より駆除剤を確実に定期的に投与することが重要です。駆除剤も感染を100%防げるわけではありませんが、有効な忌避剤がない現状では感染の機会を少しでも減らすには有効と考えます。犬は春から秋まではフィラリア予防でマダニ駆除もできる薬を投与している方も多いですが、外に出る猫の駆除剤投与の割合がまだまだ低いと感じます。

実は冬でも駆除剤の投与が非常に重要です。発症猫が増加するの

が2〜4月です。ウイルス感染した母犬が産んだ卵（1カ月で数千個）からかえった幼犬もウイルス感染していて、越冬中のこの幼犬と少し成長した若犬にかまれることで感染します。葉っぱや落ち葉の裏や木の枝にいる幼犬が1匹ほどと非常に小さく気が付かないことが多いと言われます。外に出る猫こそ通年でしっかり予防駆除をしてほしいと切に願います。

ペットの感染を防ぐと同時に、ペットから飼い主に感染するリスク、診察する私たちに感染するリスクを少しでも減らすことができます。駆除剤のことはかかりつけの動物病院にご相談ください。

毎月第1土曜掲載